国立国語研究所学術情報リポジトリ

児童の副詞使用に関する調査：『児童の作文使用語彙』の副詞データを用いて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2026-07-17 キーワード: 児童作文, 副詞, オノマトペ, 国語辞典, 日本語能力試験出題基準 作成者: 劉, 時珍 メールアドレス: 所属: 国立国語研究所 非常勤研究員
URL	https://doi.org/10.15084/0002000710

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International License.

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 31: 1–15 (2026) Licensed under CC BY-SA
ISSN 2186-1358

児童の副詞使用に関する調査
――『児童の作文使用語彙』の副詞データを用いて――

劉　時珍

国立国語研究所 非常勤研究員

要旨

本稿は『児童の作文使用語彙』（国立国語研究所 1989）に収録された児童の作文中の副詞 1431 語を対象とし，その使用実態と特徴を明らかにすることを目的とする調査報告である。

まず，副詞を下位分類（陳述・程度・様態）に基づいて整理し，児童作文における副詞使用の傾向を数量的に分析した。次に，小学生向けの国語辞典と一般向けの国語辞典の採録状況を確認するとともに小学校国語教科書で使われている副詞，及び，日本語能力試験出題基準の語彙リストとの重なりを比較した。

その結果，延べ語数では陳述副詞および程度副詞の比率が高い一方で，異なり語数では様態副詞が多数を占め，とりわけオノマトペのバリエーションが豊富であることが示された。また，辞書や語彙リストに未掲載の語の多くがオノマトペであることも確認された。これらの結果から，児童作文においてオノマトペが重要な役割を果たしている可能性が示唆される *。

キーワード：児童作文，副詞，オノマトペ，国語辞典，日本語能力試験出題基準

1. はじめに―問題意識及び調査の目的

文部科学省（2011）は「言語の力を使って，子どもたちの思考力・判断力・表現力などを育む」ことを学習指導要領「生きる力」の目標に据え，児童の言語表現のバリエーションを増やすことが学校教育，言語教育の一つの課題になっている。本稿では，『児童の作文使用語彙』（国立国語研究所 1989）という，複数のジャンルの作文集に掲載された児童の作文の語彙のうち，副詞の使用実態に着目し調査をした。これは，国立国語研究所にて 7 年計画で行われた「児童作文に関する調査研究」の成果として公開されている語彙表である。この調査は村石昭三氏をはじめとする当時の国立国語研究所の言語教育研究部第一研究室によって行われた。10 誌，約 300 冊の作文集に掲載された各学年 4000 編，合計 2 万 5000 編の作文が集められ，その中の語彙が集計された，児童の作文使用語彙調査である。

本稿では，その『児童の作文使用語彙』の中の 1431 例の副詞（以下「児童作文副詞」と呼ぶ）を調査データにしている。同報告書では語彙使用の概観，全体像は述べられているが，品詞ごとの詳細な分析は行われないまま，現在に至っている。それ以降，児童の語彙使用に関する大規模

* 本研究は，国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（プロジェクトリーダー：小木曽智信）のサブプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」（プロジェクトリーダー：柏野和佳子）及び，JSPS 科研費 JP23H00072（代表者：松下達彦）の研究成果である。なお本稿は，2024 年 9 月 17 日「学習者辞書用語彙資源の構築」共同研究発表会における口頭発表「小学生の副詞の習得の特徴」をもとに加筆修正したものである。

調査は行われていない。

なお，調査データを扱うに際しては，語彙を使用する際の語彙選択に関わる前提条件として，以下の 4 点に留意した。

1）家庭継承語の影響（外国籍の親を持つ子も含む）を受ける。
2）学校教育における日本語の書き言葉と話し言葉の教育の内容，教科書及び読み物からの影響を受ける。
3）作文のタイプ，及び読書量の個人差の影響も大きい。
4）また，児童の天性（感情の表出欲･誇張的な言葉の選好傾向)･個人差からも表現のバリエーションが生じる。

以上を踏まえて，次の 2 点から小学生の副詞の特徴を見る。

① 副詞の下位分類からとらえる児童作文副詞の特徴。
② 辞書や教科書の中の副詞との比較による児童作文副詞の特徴。

ただし，本調査は，作文から抽出した語彙表のデータを用いている。これには前後文脈がなく，多義語である場合の区別はつけられていない。よって本調査において多義性は考慮していない。

2. 先行研究

2.1 小学生語彙調査に関する先行研究

本節では，小学生語彙調査に関する先行研究として，バドラー後藤（2010），田中（2020）と田中他（2021）を取り上げる。

バトラー後藤（2010）は，JSL（Japanese as a Second Language：第二言語としての日本語）児童･生徒が学習すべき日本語の語彙のうち，一般語でも専門語でもない「学習語」に関するリスト作成の概要を述べたものである。このリストは，当時国立国語研究所が開発中の「小中高校の教科書コーパス」（2008 非公開）を用い，日本語指導の実務者による判定を交えて作成されたものである。

一方，田中（2020）は，JSL 児童に対する日本語教育の基礎資料とするために構築され，公開されたデータベースである COSMOS の概要を述べたものである。田中他（2021）は，田中（2020）でその概要が紹介されている COSMOS の利用方法を論じたワークショップの内容の報告である。本調査で利用したのは，田中（2020）で，国語教科書 5 社 51 冊に収録されたデータベースの中から光村出版の小学校 1 年生から 6 年生までの国語教科書中の語彙を抽出し，それに対するアノテーションが行われたものである。元の語彙リストの品詞欄が「副詞」であるものを抽出して，1 年生から 6 年生の順に並べてリスト化し，調べる項目を列に設けて得点化している。

2.2 本調査に関わる研究方法，定義に関する先行研究

本調査では，副詞を分類する際に，山田（1936）の分類を基準に，詳しい分類の仕方については仁田（2002）を参考にした。

副詞の下位分類である陳述・程度・様態副詞の山田（1936）での定義の概要はそれぞれ次のようなものである。

陳述副詞は，文末の陳述成分と呼応する副詞で，誘導副詞，文副詞と呼ばれることもある。程度副詞は，用言（主に形容詞）を程度の観点から修飾する副詞である。様態副詞は，上記 2 種の副詞以外の副詞の総称である。

こうした一般的な分類の不備を指摘し，命題対象の副詞（上記分類で言う程度副詞と様態副詞）の再検討を行ったのが仁田（2002）であり，陳述副詞を除く命題対象の副詞を，程度の副詞，様態の副詞，程度量の副詞，時間関係の副詞，頻度の副詞の 5 種に分けている。

本稿ではまた，様態副詞とオノマトペの境界線を引くために，両者を以下のように定義する。

まず，様態副詞は用言（通常は動詞）を動きや出来事のあり方の側面から修飾する副詞である。

・彼女はゆっくり歩いていた。

・彼は急にスピーチをした。

本稿におけるオノマトペの判定は，金田一（1978: 3–6）の定義を基準とし，形態的特徴（反復形，促音・撥音を含む形，「と」を伴う形など）および語義を総合的に勘案し，筆者が判定した。例えば，次のようなものである。

・両チームの実力はとんとんだ。

・たくあんをぱりぱりとかむ。

・ぽかんと口を開く。

2.3 児童の副詞の習得と日本語教育におけるオノマトペの習得に関する先行研究

本節では，日本語を母語とする児童の副詞の習得との比較対象として，非日本語母語話者を対象とする日本語教育における副詞習得上の問題点，特に副詞に分類されているオノマトペ習得上の問題点に関する先行研究を取り上げる。

三上（2007）は，日本語教育におけるオノマトペの適切な指導のあり方を論じたものであるが，その第 4 章では，日本語教育におけるオノマトペの扱いの不適切さについていくつかの指摘が行われている。その中でも，初級日本語教育において，文型に焦点が当てられるあまり，語彙教育が等閑視されていることや，オノマトペについては積極的に教えられない限り学習者は未習のままになってしまう危険性が高いという指摘は，本稿との関係からも重要である。同論文では，こうした問題意識を踏まえたオノマトペに関する基本語彙調査も行われている。

獅々見（2016）は，オノマトペに関する会話教材作成の基礎作業としての，オノマトペ基本語彙調査の結果を報告したものである。同調査では，会話コーパスとオノマトペ辞典を参照することで基本オノマトペを選定し，それに 20 代から 60 代以上の幅広い年代の男女を対象とする親密度調査の結果を加えて，オノマトペに関する基本語彙を提案している。

3. 調査方法

本調査では『児童の作文使用語彙』のデータ中の品詞欄に「副詞」の記載があるもの全てを抽出した。その考察対象語の総数は 1431 語である。これらを調査目的に応じて再整理して，結果をまとめる。詳しい調査方法は以下の通りである。

1. まず，児童作文副詞の概観。1431 語の副詞を概観し，下位 3 類（陳述・程度・様態）に分類し，その特徴を見る。
2. 次に，国語辞典及び小学校教科書・日本語教育関連語彙リストとの比較。児童作文副詞が小学生向けの国語辞典『例解学習国語辞典　第十一版』（金田一（編）2019）（以下『例解学習』と呼ぶ），及び，小学校の国語教科書（光村図書『国語』1–6 学年（以下『小学校の国語教科書』と呼ぶ）に記載されているか否か，記載されている場合どのように記載されているか，辞書に掲載されている副詞との重複率，小学校の教科書に記載されている副詞（オノマトペも含む）との重複率などを調べる。更に，『例解学習』に記されている小学校で習得すべき語彙（辞書の中でピンク色に表示されているもの）の中から副詞をピックアップして，調査データとの重複率を算出し，児童作文副詞の特徴を見る。一方で，一般向けの国語辞典『岩波国語辞典 第五版』（西尾他（編）1994）（以下『岩波』と呼ぶ）に記載されているか否かを同辞典のコーパス（岩波書店 2021）を利用して確認し，その重複率から児童作文副詞の特徴を考察する。また，日本語学習者向けの語彙リストである『日本語能力試験出題基準』（国際交流基金・日本国際教育協会（編著）1994）（以下『出題基準』と呼ぶ）収録の副詞との比較から児童作文副詞のバリエーションを考察する。

4. 調査結果

4.1 児童作文副詞の概観

まず，本稿の調査対象である児童作文副詞 1431 語を下位 3 分類（陳述・程度・様態）に分けて，それぞれの異なり語数と延べ語数を見る。結果は以下の表 1，図 1 の通りである。

表 1，図 1 からわかるように，延べ語数においては陳述副詞，程度副詞が大半を占めている。一方，異なり語数においては様態副詞が多数を占めており，様態副詞のバリエーションがもっとも豊富であることがわかる。

表 1　副詞の下位 3 分類（陳述・程度・様態）による出現度数

副詞の分類	陳述	程度	様態	合計
延べ語数	16118	10597	6596	33311
比率	48.39%	31.81%	19.80%	100%
異なり語数	182	81	1168	1431
比率	12.72%	5.66%	81.62%	100%

表 1 のデータにカイ二乗検定，残差分析を行った結果は以下の通りである。

表 2　表 1 の検定結果

	陳述	程度	様態	合計
延べ	16118 ↑ **	10597 ↑ **	6596 ↓ **	33311
異なり	182 ↓ **	81 ↓ **	1168 ↑ **	1431

$\chi^2(2)=3023.746$，$p<.001$，Cramer's V=0.295[1]
↑：有意に多い，↓：有意に少ない（*$p<.05$　**$p<.01$）

カイ二乗検定を行った結果，区分（延べ／異なり）とカテゴリ（陳述・程度・様態）の間には有意な関連が認められた（$\chi^2(2)=3023.746$，$p<.001$，Cramer's V=0.295）。残差分析の結果，延べでは「陳述」「程度」が有意に多く，「様態」は有意に少なかった。一方，異なりでは「様態」が有意に多く，「陳述」「程度」は有意に少なかった（いずれも $p<.01$）。

表 1 を図示すると図 1 のようになる。

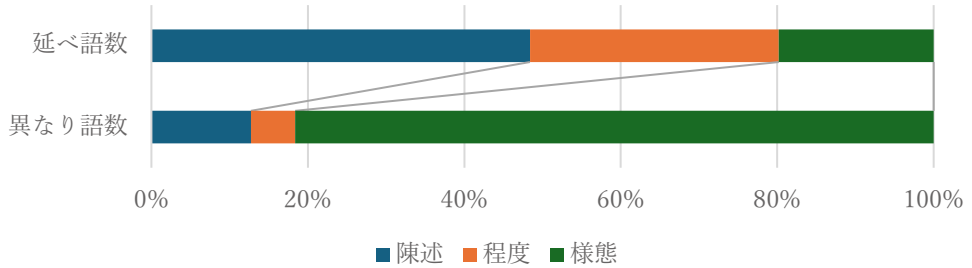

図 1　副詞の下位 3 分類（陳述・程度・様態）による出現度数

4.1.1 副詞の用例数の上位 15 位

本節では，児童作文副詞の延べ語数の上位語を確認する。

まず児童作文副詞全体の，延べ語数上位 15 位は以下の表 3 の通りである[2]。この表からわかるように，延べ語数の上位には様態副詞は存在せず，陳述副詞と程度副詞のみである。このことからも，様態副詞は語のバリエーション（異なり語数）は多いものの，個々の語の使用頻度（延べ語数）は多くないという表 1，図 1 の結果が確認される。

[1] カイ二乗検定は js-STAR XR+(ver.2.5.0)（https://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/）を用いて行った。なお，本検定は語彙項目単位での分布傾向を確認することを目的とするものであり，厳密な母集団推定を意図するものではない。
[2]『児童の作文使用語彙』（国立国語研究所 1989）では，「作文使用語彙表」の「見出し」はすべてカタカナ表記で，「表記」欄に常用漢字がある場合は漢字表記だが，本稿では，『例解学習』の見出しを基準に，ひらがな表記で統一する。ただし，オノマトペの長音表記は児童作文副詞の「見出し」と同様に「ー」を用いる場合もある。

表 3　副詞全体の延べ語数上位 15 位

順位	副詞	度数
1	とても（程度）	2207
2	もう（陳述）	1790
3	すこし（程度）	1343
4	また（陳述）	1243
5	よく（程度）	1115
6	すぐ（陳述）	980
7	まだ（陳述）	728
8	どう（陳述）	709
9	たくさん（程度）	682
10	そう（陳述）	665
11	いちばん（程度）	648
12	いっぱい（程度）	555
13	やはり（陳述）	536
14	いつも（陳述）	535
15	やっと（陳述）	501
小計		14237
全例に対するカバー率（全例 33311）		42.74%

4.1.2 陳述副詞の上位 15 位

ここからは，児童作文副詞の使用頻度を，陳述，程度，様態の類ごとに見る。表 4 は陳述副詞の延べ語数上位 15 位の語である。この表から，陳述副詞の上位を占めるのは時間（テンス・アスペクト）に関わる副詞, 指示詞関係のものが多いことがわかる。モダリティに関わるものは「やはり，やっと，なんだか」のみであまり多くない。

表 4　陳述副詞の延べ語数上位 15 位

順位	陳述副詞	度数
1	もう	1790
2	また	1243
3	すぐ	980
4	まだ	728
5	どう	709
6	そう	665
7	やはり	536
8	いつも	535
9	やっと	501
10	だんだん	452
11	しばらく	356
12	ときどき	334
13	はじめて	331
14	どうして	327
15	なんだか	291
小計		9778
陳述副詞全例に対するカバー率（全例 16118）		60.67%

4.1.3 程度副詞の上位 15 位

続いて，程度副詞の延べ語数上位 15 位を見たのが表 5 である。表 5 には，程度や量が「多」であるもの（とても，よく，たくさん，いっぱい等）が多い。また，この中には否定と呼応する用法を合わせ持つもの（とても，あまり，なかなか，あんまり）が見られることにも注目したい。

表 5　程度副詞の延べ語数上位 15 位

順位	程度副詞	度数
1	とても	2207
2	すこし	1343
3	よく	1115
4	たくさん	682
5	いちばん	648
6	いっぱい	555
7	ちょっと	491
8	もっと	478
9	あまり	441
10	なかなか	368
11	ずっと	291
12	どんどん	254
13	いろいろ	205
14	ちょうど	188
15	ずいぶん	139
小計		9405
程度副詞全例に対するカバー率（全例 10597）		88.75%

4.1.4 様態副詞の上位 15 位

最後に，様態副詞の延べ語数上位 15 位をまとめたのが表 6 である。

表 4，表 5 と比べた表 6 の第一の特徴は，上位語への集中度の違いである。上位 15 位までの語への集中度は表 4（陳述副詞）では 60% 強で，表 5（程度副詞）では，90% 弱であるのに対し，表 6（様態副詞）では 30% 未満である。

第二の特徴は，様態副詞の上位語の大部分が「オノマトペ」と見なしうる語であるということである。様態副詞の異なり語数 1168 語のうち，1155 語はオノマトペであると見なせる。表 6 の語の大部分が促音または撥音を含んでおり，「と」で終わるものも多い。これらはオノマトペの形態的特徴であり，このことからも上位の様態副詞のすべてがオノマトペであると言える。

表 6　様態副詞の延べ語数上位 15 位

順位	様態副詞（オノマトペを含む）	度数
1	じっと	242
2	ほっと	176
3	ゆっくり	160
4	そっと	141
5	ちゃんと	116
6	はっきり	99
7	しっかり	89
8	きちんと	87
9	すっかり	78
10	ふと	75
11	ぱっと	67
12	はっと	59
13	どきっ	58
14	ぐるぐる	51
15	すう	43
	小計	1541
様態副詞全例に対するカバー率（全例 6596）		23.36%

表 6 に見られるように様態副詞において上位語の集中度が低いのは，表 1 にも示したように，オノマトペの異なり語数が多いためである。オノマトペの使用語数を学年別に集計した結果，調査対象の作文の本数に関しては低学年が多いのに対して，学年が上がるにつれて，オノマトペの使用語数が増えることがわかった。以下の表 7 の通りである。

表 7　オノマトペ（異なり 1155 語）の学年別の使用実態

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	5 年生	6 年生
出現度数	452	742	936	942	1243	1267
使用人数*	519	877	1115	1090	1419	1448

*この表の使用人数とは個々のオノマトペの使用人数を合算した値である。

4.1.5 様態副詞（オノマトペ）のバリエーション

様態副詞の上位 15 位の表 6 の結果から，様態副詞はバリエーションが豊かであることがわかる。一方，児童作文の中に 10 回以上使われているものの『例解学習』には載っていないオノマトペの内訳を度数の降順で一覧表にした。以下の表 8 の通りである（モーラを ABC で示した）。

表 8　辞書に載っておらず，頻出したオノマトペの一覧表

No	副詞（オノマトペ）	形（ABC 片仮名表記）	出現度数						度数合計	使用人数						人数合計
			1年	2年	3年	4年	5年	6年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
1	どきっ	AB ッ	2	3	10	18	13	12	58	2	3	9	12	10	9	45
2	すう	A－	—	5	5	12	11	10	43	—	5	5	11	10	8	39
3	きゃあ	A－	6	2	14	5	8	4	39	4	2	9	5	7	3	30
4	ぴー	A－	2	15	4	6	5	6	38	2	10	4	3	5	5	29
5	しいん	A－ン	—	2	4	8	3	15	32	—	2	4	6	3	15	30
6	ふう	A－	—	8	5	3	5	3	24	—	8	5	3	5	3	24
7	ぷーん	A－ン	1	1	2	4	11	3	22	1	1	2	4	10	3	21
8	ぴょんぴょん	A ン A ン	2	3	10	4	2	1	22	2	2	7	4	2	1	18
9	ぴーぴー	A－A－	—	4	8	8	2	—	22	—	4	7	5	1	—	17
10	にゃー	A－	3	8	8	—	3	—	22	1	5	4	—	1	—	11
11	どきん	AB ン	—	3	—	11	2	5	21	—	3	—	6	1	3	13
12	ぱーん	A－ン	5	—	5	1	3	6	20	3	—	2	1	3	4	13
13	にこっ	AB ッ	7	1	3	3	4	1	19	6	1	3	3	4	1	18
14	ばーん	A－ン	—	—	5	6	5	3	19	—	—	4	6	5	2	17
15	はあはあ	A－A－	2	3	3	2	3	5	18	2	3	3	2	3	5	18
16	びくっ	AB ッ	1	1	1	5	4	6	18	1	1	1	5	4	6	18
17	どーん	A－ン	4	6	2	2	—	3	17	3	4	2	1	—	3	13
18	ぴょん	A ン	—	7	3	3	1	3	17	—	3	3	2	1	1	10
19	りーん	A－ン	1	4	8	—	2	2	17	1	2	3	—	1	1	8
20	せっせ	A ッ A	—	—	1	3	9	3	16	—	—	1	3	8	3	15
21	ぽんぽん	A ン A ン	6	3	5	—	1	1	16	5	3	4	—	1	1	14
22	ううー	AA－	1	2	5	—	3	5	16	1	2	3	—	2	4	12
23	ぴぴぴぴ	AAAA	1	4	—	8	—	3	16	1	3	—	6	—	2	12
24	ぴ	A	—	9	—	5	1	1	16	—	3	—	4	1	1	9
25	ごちゃごちゃ	ABAB	1	—	5	2	5	2	15	1	—	5	1	5	1	13
26	ばん	A ン	—	2	1	3	5	4	15	—	2	1	3	3	3	12
27	ぶくぶく	ABAB	4	5	4	—	—	2	15	3	3	4	—	—	2	12
28	はー	A－	—	—	—	4	6	5	15	—	—	—	1	5	2	8
29	きゃあきゃあ	A－A－	4	1	4	—	2	2	13	4	1	4	—	2	2	13
30	ふうん	A－ン	—	2	4	—	3	4	13	—	2	4	—	2	4	12
31	がたん	AB ン	—	2	8	1	2	—	13	—	1	5	1	1	—	8
32	ぱくっ	AB ッ	3	—	3	1	6	—	13	2	—	3	1	1	—	7
33	どっしり	A ッ BC	—	—	1	2	4	5	12	—	—	1	2	4	5	12
34	ぱくぱく	ABAB	1	3	2	3	1	2	12	1	3	2	2	1	2	11
35	わん	A ン	4	3	2	—	—	3	12	2	2	2	—	—	2	8
36	ぴく	AB	2	2	—	4	2	2	12	1	1	—	2	2	1	7
37	じりりりり	ABBBB	1	—	—	—	—	11	12	1	—	—	—	—	5	6
38	つん	A ン	—	—	3	2	2	5	12	—	—	3	2	2	3	10
39	じーん	A－ン	—	—	—	1	8	2	11	—	—	—	1	8	2	11
40	ぎゃあ	A－	—	2	3	3	2	1	11	—	2	2	2	2	1	9
41	どどどどど	AAAAA	—	1	1	5	2	2	11	—	1	1	3	1	2	8
42	ぴよぴよ	ABAB	—	2	5	2	1	1	11	—	1	3	2	1	1	8
43	くんくん	A ン A ン	2	1	1	3	2	1	10	2	1	1	3	2	1	10
44	さーっ	A－ッ	—	3	1	3	—	3	10	—	3	1	3	—	2	9
45	しゅっ	A ッ	2	4	1	1	1	1	10	2	3	1	1	1	1	9
46	がら	AB	—	1	1	2	1	5	10	—	1	1	1	1	4	8
47	きー	A－	—	5	1	1	3	—	10	—	2	1	1	3	—	7
48	ずきん	AB ン	—	2	2	—	2	4	10	—	1	1	—	1	3	6
49	ざざー	AA－	—	—	4	2	1	3	10	—	—	1	1	1	2	5

この表の中のオノマトペを見ると，「すう」「ぴー」「ふう」などの「A－」のような単純に繰り返しの長音形のオノマトペが多いことがわかった。次に，「どきっ」「にこっ」などの「AB ッ」のような最後に促音の形をしている語もある。また,「しいん」「どきん」などの「A－ン「AB ン」のような最後に撥音の「ン」の形をしている語もある。「ごちゃごちゃ」「ぶくぶく」のような「ABAB」型もある。

4.2 国語辞典及び小学校教科書・日本語教育関連語彙リストとの比較

本節では，児童作文副詞 1431 語と，国語辞典及び小学校教科書・日本語教育関連語彙リストとの比較結果について述べる。

4.2.1 小学生向け国語辞典の『例解学習』にある副詞との比較

まず，児童作文副詞 1431 語と『例解学習』との比較結果は表 9 の通りである。1431 語中 768 語（53.67%）が掲載されていない。また, その掲載されていない 768 語中のうちの 751 語（97.79%）はオノマトペであった。

表 9 『例解学習』との比較 1

	辞書記載あり	辞書記載なし	合計
副詞の度数	663	768	1431
比率	46.33%	53.67%	100%

4.2.2『例解学習』における「基本語」の副詞との比較

次に，『例解学習』において「基本語」とされている語を小学校で習得することが期待されている語と見なし，それと児童作文副詞 1431 語との重なりを見たのが表 10 である。

これを見ると，児童作文副詞と『例解学習』で「基本語」とされている副詞 247 語との重なりは 79.35% になっている。このことから，本調査で用いた『児童の作文使用語彙』で調査対象である作文においては，小学校で習得することが期待されている語彙が実際に使われている割合が高いことがわかる。

表 10 『例解学習』との比較 2

	重なりあり	重なりなし	合計
児童作文副詞の度数	196	1235	1431
比率	13.70%	86.30%	100%
『例解学習』の「基本語」の副詞の度数	196	51	247
比率	79.35%	20.65%	100%

表 10 の児童作文副詞と『例解学習』における「基本語」の副詞との重なりの有無について，カイ二乗検定と残差分析を行った。表 11 の通りである。

表 11　表 10 の検定結果

	重なりあり	重なりなし	合計
児童作文副詞	196 ↓ **	1235 ↑ **	1431
『例解学習』の「基本語」の副詞	196 ↑ **	51 ↓ **	247

$\chi^2(1)=503.498$, $p<.001$, $\phi=0.548$
↑：有意に多い，↓：有意に少ない（*$p<.05$　**$p<.01$）

その結果，両者の間には有意な関連が認められた（$\chi^2(1)=503.498$, $p<.001$）。残差分析の結果，児童作文副詞では「重なりなし」が有意に多く，「重なりあり」が有意に少ないことが示された。一方，国語辞典の「基本語」の副詞では「重なりあり」が有意に多く，「重なりなし」は有意に少なかった（$p<.01$）。

4.2.3『小学校の国語教科書』における副詞との比較

田中（2019）における『小学校の国語教科書』の中の副詞との重複率を以下の表 12 にまとめた。比率からわかるように，児童作文副詞は『小学校の国語教科書』の 25.23% を占めており，重なる語には基本語彙が多い。重ならないのは 1070 語で全体の 74.77% である。

表 12　児童作文副詞と『小学校の国語教科書』との比較

	重なる語数	重ならない語数	合計
副詞の度数	361	1070	1431
比率	25.23%	74.77%	100%

4.2.4 一般向けの『岩波』における副詞との比較

次に，一般向けの国語辞典である『岩波』と本稿の調査対象の副詞 1431 語との重なりを見ると，表 13 のようになる。1431 語の中に 505 語（35.29%）が掲載され，926 語（64.71%）が掲載されていないことがわかった。表 9 で見た小学生向けの『例解学習』の場合と比べると，記載ありに 10% 程度の差があるが，これは収録語数が同程度の両辞典における収録語の選定基準によるものと考えられる。

表 13　児童作文副詞と『岩波』との比較

	辞書記載あり	辞書記載なし	合計
副詞の度数	505	926	1431
比率	35.29%	64.71%	100%

4.2.5 日本語教育の語彙リストにおける副詞との比較

最後に，非日本語母語話者対象のレベル別語彙リストである『出題基準』の中の副詞との比較を行った結果が表 14 である。『出題基準』のうち，旧日本語能力試験 4 級語彙を基本語彙と見なし，それと児童作文副詞 1431 語との重なりを見たところ，重なったのは 10.62% に過ぎなかった。これは，本稿の調査対象の副詞 1431 語には，オノマトペの数が多いのに対し，『出題基準』4 級にはほとんどオノマトペが採録されていないためである。

表 14　児童作文副詞と『出題基準』4 級の語彙との比較

	リスト記載あり	リスト記載なし	合計
副詞の度数	152	1279	1431
比率	10.62%	89.38%	100%

表 12 〜表 14 を以下の形に整理した上で，カイ二乗検定をかけ，残差分析を行った。

表 15　表 12 〜表 14 の検定結果

	記載あり	記載なし	合計
『小学校の国語教科書』	361	1070	1431
『岩波』	505 ↑ **	926 ↓ **	1431
『出題基準』4 級	152 ↓ **	1279 ↑ **	1431

$\chi^2(2)= 243.402$，$p<.001$，Cramer's V=0.238
↑：有意に多い，↓：有意に少ない（*$p<.05$　**$p<.01$）

カイ二乗検定の結果，教科書以外は，『岩波』と『出題基準』という資料の種類と記載の有無には有意な関連が認められた。残差分析の結果，『岩波』では「記載あり」が有意に多く，『出題基準』4 級では「記載あり」が有意に少ないことが明らかになった。

5. 考察

5.1 調査対象の児童作文副詞の特徴―オノマトペ表現の豊富さ

4.1 節の児童作文副詞の延べ語数と異なり語数の比較結果から，陳述副詞の延べ語数の比率が最も高く，次に高いのは程度副詞であることがわかった。例えば，上位の副詞には，程度・頻度副詞（「とても」「いちばん」「よく」など），時間副詞（「いつも」「ときどき」など），物事の進展を表す副詞（「だんだん」「やっと」など），順序を表す副詞（「また」など）が見られた。

それに対して，様態副詞の異なり語数の比率が著しく高いこともわかった。これは，陳述副詞が修飾語でありながら陳述性を持っている一方で，状態の描写，また音の表記などの表音機能を持つ様態副詞が数多く存在するためである。

藤野（2023）が日本はオノマトペ大国だと指摘しているように，今回の調査でも，様態副詞の中にオノマトペが多く，様態描写の擬態語（例えば，「みるみる」「ぐずぐず」（重ね型の様態副詞），「しっかり」（意味定着の様態副詞））などが多く使われている。本調査の対象である児童作文は叙事，描写などのジャンルの作文が多いため（国立国語研究所 1989: 22–23），オノマトペの擬声語・擬態語は使いやすかったと考えられる。表 7 で示したように，低学年から高学年に上がるにつれて，オノマトペの使用語数も使用人数も増えて，児童にとってオノマトペはよく習得されていると言える。それは，生き生きした言葉で表現することを試みようとした結果であるように思われる。

また，語彙習得の過程と見られるものもあった。具体例で言うと，「はっ（と）」「どきっ（と）」という擬声語には後ろによく「と」が付くが，その「と」が付かない使用例が少なくなかった。話し言葉では「と」を付けずに使用されることも多いことから，それをそのまま書き言葉でも使っ

ていると考えられる。非母語話者である筆者からは，擬声語・擬音語の後ろに「と」を付ければ副詞になるというのは，日本語の一種の造語法のように思われる。そのため児童作文において，その「と」が付かない例があることにも着目した。

一方，日本語能力試験の旧 4 級の中の副詞リストと照らし合わせた結果，オノマトペの語彙数は少なかった。このことから，母語話者の児童がオノマトペ使用に長けていることと，オノマトペの習得が日本語学習者には容易ではないという二点が挙げられる。母語話者は，日常生活では大人もよくオノマトペを使い，書き言葉としてもオノマトペがよく使われる。よって，日本語学習者はオノマトペ習得の優先順位を検討する必要があるだろう。

5.2 重なり率の結果から見られたこと

4.2 節では国語辞典（小学生向けのものも含む），小学校教科書と非母語話者対象の日本語教育の語彙リストとの重なり率を比較した。児童作文副詞は『例解学習』との重なり率（46.33%）が最も高く，次に一般向けの『岩波』が 35.29%，小学校教科書が 25.23% と続き，日本語学習者向けの『出題基準』は最も低く，10.62% であった。『例解学習』の重なり率が最も高かったという点から，使用頻度が高い陳述副詞と程度副詞は児童も普通に使っているということがわかった。

全体的に重ならない率が高かった理由は，児童作文副詞の中のオノマトペは音を様々に表現するものが多く辞書に載っていないものが多かったためと考えられる。

これらのことから低学年では，感情を表す「わくわく」のようなオノマトペが最初に学びやすいと言えそうである。その後，よく使われるさまざまな様態副詞やオノマトペを使えるよう教え，さらに，改まった言葉・文章語の副詞を学んでいく，といったような段階性を設けると良さそうであることが示唆される。そのような段階性を考慮した副詞の語彙リストを指導書として用意し，提示していけると良いと考えられる。

6. おわりに

本稿では，『児童の作文使用語彙』（国立国語研究所 1989）に収録された児童作文中の副詞 1431 語を対象に，下位分類および各種語彙資料との比較を通して，児童作文における副詞使用の特徴を検討した。

その結果，延べ語数においては陳述副詞および程度副詞の比率が高い一方で，異なり語数においては様態副詞が大きな割合を占めることが明らかとなった。とりわけ様態副詞にはオノマトペが多く含まれ，児童作文において多様なオノマトペが使用されていることが確認された。これらは，児童が出来事や心情を具体的かつ生き生きと描写しようとする際に，オノマトペが一定の役割を果たしている可能性を示唆するものである。

また，国語辞典，小学校教科書，日本語教育関連語彙リストとの比較からは，児童作文副詞の中には辞書等に未掲載の語が相当数存在し，その多くがオノマトペであることが明らかになった。これらの結果は，児童の実際の言語使用と既存の語彙資料との間に一定の差異があることを示していると考えられる。

一方，本研究で用いたデータは 1989 年刊行の資料に基づくものであり，現代の児童の言語使用状況を直接反映するものではない可能性がある。また，本調査は語彙表データを用いた分析であるため，個々の語の文脈的機能や表記の実態までは検討できていない。今回用いた児童作文副詞は表記が片仮名に統一されているため，副詞の表記の揺れや書き分けの実態については分析の対象とすることができなかった。今後は，実際の作文テキストに即した資料を用い，副詞の表記のあり方やアクセントを含む音声的特徴についても検討を進めていく必要がある。

本研究は，児童作文における副詞，とりわけオノマトペの使用実態を数量的に把握することを目的とした基礎的調査である。児童の語彙習得や語彙教育を考える上で，実際の使用データに基づく検討を積み重ねていくことが今後の課題である。

参照文献

岩波書店（2021）『GSK2021-D 岩波国語辞典第五版コーパス』東京：言語資源協会.
金田一京助（編）（2019）『例解学習国語辞典　第十一版』東京：小学館.
金田一春彦（1978）「擬音語・擬態語概説」浅野鶴子（編）『擬音語・擬態語辞典』3–6. 東京：角川書店.
国際交流基金・日本国際教育協会（編著）（1994）『日本語能力試験出題基準』東京：凡人社.
獅々見真由美（2016）「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙選定」『日本語教育』165: 73–88.
田中祐輔（2020）「COSMOS」『計量国語学』32(5): 277–287.
田中祐輔・森篤嗣・毛利田奈津子（2021）「分科会 1 ワークショップ―帰国・外国人児童のための JSL 国語教科書語彙シラバスデータベース『COSMOS』の活用―」『子どもの日本語教育研究』4: 31–42.
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（1994）『岩波国語辞典　第五版』東京：岩波書店.
仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 3　副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.
バトラー後藤裕子（2010）「小中学生のための日本語学習語リスト（試案）」『母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究』6: 42–58.
藤野良孝(2023)「インタビュー―聞いてビックリ！“オノマトペ(擬音語や擬態語)”の知られざる底力とは？」（NHK-FM「眠れない貴女へ」2023 年 12 月 10 日放送）https://www.nhk.or.jp/radio/magazine/article/nemurenai/nem20231210.html（2024 年 11 月 24 日確認）
三上京子（2007）「日本語オノマトペとその教育」博士論文，早稲田大学.
文部科学省（2011）「新学習指導要領･生きる力」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm（2025 年 10 月 10 日確認）
山田孝雄（1936）『日本文法概論』東京：宝文館.

調査データ出典

国立国語研究所（1989）『児童の作文使用語彙』（国立国語研究所報告 98）東京：東京書籍.
田中祐輔（2019）COSMOS―帰国・外国人児童のための JSL 国語教科書語彙シラバスデータベース https://cosmos.education/#page12（2025 年 1 月 10 日確認）

Adverb acquisition by Japanese elementary school students: Adverb data from *Vocabulary used in children's writings*

LIU Shizhen

Adjunct Researcher, NINJAL

Abstract

To clarify usage patterns and characteristics of adverbs, this study examined 1,431 adverbs found in children's compositions as recorded in *Vocabulary used in children's writings* (The National Language Research Institute 1989).

First, the adverbs were organized based on their subcategories (modal, degree, manner), and the tendencies in adverb usage within the children's compositions were quantitatively analyzed. Next, the inclusion status in Japanese dictionaries for elementary school students and general readers was confirmed. In addition, the overlap was compared with adverbs used in elementary school Japanese language textbooks and the vocabulary list in the Japanese Language Proficiency Test (JLPT), which is for non-native speakers of Japanese.

The results indicated that while modal and degree adverbs accounted for a high proportion of the total number of words, manner adverbs constituted the majority in terms of distinct words, with a particularly rich variety of onomatopoeia. Furthermore, the results confirmed that many words not included in the dictionaries or the vocabulary list are onomatopoeic. Accordingly, onomatopoeia may play an important role in children's compositions.

Keywords: children's compositions, adverbs, onomatopoeia, Japanese dictionaries, Japanese language proficiency test: test content specifications